

創刊
600号
記念

戦後八〇年 法と民主主義の今を問う

九六一年一〇月、平和と民主主義を
求める国民的大運動である「六〇年
安保闘争」に参加した法律家たちの手に
よって設立された、日本民主法律家協会(日
民協)が、その創設から営々と発行し続け
てきた機関誌、「法と民主主義」(法民)が創
刊六〇〇号を迎えることとなった。

今年は、六〇年安保条約によって、その
「原点」が大きく脅かされることになった日
本国憲法を生み出した第二次世界大戦の終
結から八〇年、すなわち「戦後八〇年」に
当たる。この「八〇年」がことさらにクロ
ズアップされるのは、人間の平均的な自然
年齢が八〇歳前後であって、「八〇年前」を
自らの記憶として留めている人(被爆者や従
軍兵士)が希少であり、その「記憶」を、こ
れからは後世が語り継いでいくべき歴史の
岐路にさしかかっていることによるのだろ
う。また、「戦後八〇年目」を迎えた昨今は、
第二次世界大戦終結が生み出した「戦後国

際社会」の節目となりそうな歴史事象が数
多く生じていることから、その意味をか
みしめるべき時となっている。昨年一〇月
の衆院選、そしてこの七月の参院選が生み
出した国内政治の状況も、「節目」を感じさ
せる事態に溢れている。

「記憶」という点では、「戦後八〇年」のほ
ぼ八掛けという「六五年」の長きにわたった
「六〇年安保」からの日々を振り返ることは、
そこから生まれた日民協にとって大切なこ
とである。本誌に掲載された論文、エッセ
イのそこそこに、それを見出していただき
たい。本誌編集委員会は、かくして、「戦後
八〇年、日民協と法民六四年」を念頭に、
論文、エッセイを寄せてもらうこととした。
第一部、「戦後八〇年」に法と民主主義を
問う」は、この間の重要な法的、政治的課
題に「戦後八〇年」に際してあらためて向
き合う論稿を集めた。第二部は、日民協も
この間に総力を挙げて取り組んでいる二

〇二〇年に起きた日本学術会議会員任命拒
否問題の当事者六人に、それぞれの学問分
野の立場から、「戦後八〇年」と学術の動
向」と題して特別に寄稿していただいた。
本誌ならではの企画である。第三部は、日
民協の活動にさまざまな形で関わってこら
れた方々によるエッセイ集であり、第四部
は、これからの日本社会と日民協の将来を
託すべき若手弁護士らによる、「戦後一〇〇
年」をも見通しての座談会である。また、末
尾には、五六四号以降の法民のラインナッ
プと同時代の年表を資料として掲載した。
通常号の倍に当たる六〇一号との合併号
は、読みごたえのある記念号になったと、編
集委員会としては自負しているが、その成
否は読者のみなさんに委ねたい。短い準備
期間で玉稿をお寄せいただいた執筆者のみ
なさんと、それら大量の原稿の編集に大車
輪で当たった事務局に感謝申し上げる。

(「法と民主主義」編集委員会)